
実況小説 居酒屋であった Lovin ' Forever! に屈しない

薔薇姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実況小説 居酒屋であった Lovin' Forever! に
屈しない

【Nコード】

N0827G

【作者名】

薔薇姫

【あらすじ】

男は飲み屋で嘔吐した。訪れる少女との出会い。ゲーム実況とは何か。二人は共に立派な羅刹として成長し、実況界は沸く。そんな二人に目を向けつつ、陰謀巡らす謎の六人組。ゲーム実況と、その裏に隠された策謀、真実とは。恋と実況、そのために生まれてきたのかもしれない。

前編（前書き）

＊本作品はニコニコ動画内で人気の実況者様方を題材に執筆した、フィクションです。作品中に出てくる実況者様の名前などはあくまで架空の物語の中の架空の人物などであり、本人様とその周囲の現実とは全く関係ありません。また、それらを侮辱・中傷する意志も毛頭有りません。どうかご理解をお願いいたします。実況者様本人から万一苦情などあった場合、即削除いたします。

前編

プロローグ 夜の静寂しじまにさえずる鵜

二十歳なんてとっくに越えた。それから二年くらい経っている。それだというのに、この散々な状況はどうなんだ。

かすれた声で従業員と利用客に謝罪し、ふらつく足を誤魔化しながら、ともすれば泣き出しそうになるのをこらえて店を出る。

寒々しい夜の大気の中、白々しく光を放つ居酒屋の看板をレビンは見上げた。

なにがどう、というわけではない。特に理由なんて無い代わりに、予兆も断りも無かった。冷え切った胃の腑に大量に流し込んだアルコールが強烈に自分を嗜めたのだともいえる。席を立ち、トイレに逃げ込み、そこで逃げ場を失った。嘔吐はあらゆる意味で無残である。

四肢を引きちぎるかのように冷たい風が、コートを貫いて骨にまで染み渡る。

いつまでも立ち竦んでいては凍えてしまう。容易には安定してくれない視点に苛立ちを覚えつつも体中の力を振り絞って歩き始める。不幸というのはなんだろうか。幸福は様々に論議されてきた。常に疑問視されてきた。しかし不幸は常に知ったかぶりを続けられてきたんじゃないだろうか。でなければだれか、気のいい誰かが自分にも注意してくれたはずである。『おい人気実況者、飲みすぎだぜ』。

わけの分らないボヤキばかりが脳みそを占拠して、どうにも上手く歩けない。本格的に不味いのだろうか——暢気にもそう思い始めたとき、視界が真っ黒に染まる。

じわじわと顔が痛み出すのと、転んだのだということが分かるのは同時だった。

痴態。なんと言う恥ずべき所業か。頭からアルコールが抜けかかってきたのか、今更ながらに自らのひどさを意識し、レ빈は地面に向かつて息を吐いた。痛む額をさすろうとして、気が付く。

力が入らない。

筋繊維が総力を挙げて労働に反抗している。膝肘足首どこもかしこも冗談のようにだらりと伸びている。

ぞっとする。このままここで寝こけるわけにはいかない。外聞という物もあるし、何より外気が危険である。泥酔者の凍死は笑い話にすらならない愚行だ。

しばらく手足をあちらこちらと懸命に動かし続け、立ち上がる努力を続けるうちに、瞼までもが重くなる。アスファルトの地面や吸い込まれそうな夜空ではない、もっとフラットな闇が視界一杯に広がった。

うP主は失踪者シリーズ。

縁起の悪い言葉だけが真っ暗な世界にぐるぐると踊る。居酒屋の帰り道であった怖い話。全くもって、恐ろしい話だ……。

「馬鹿をするからだよ」

声は、唐突に天上から降り注いできた。それほどに澄んだ声だった。すると何か細い物が腕と肩に触れ、引っ張り上げられる。驚いて目を開けると、声の主のものらしき細腕に支えられて立っている。「全く。万単位の再生数をいとも容易く叩き出す君が、こんなところで何してるんだい？」

見覚えがあった。いや、それどころか大学で何度か話したこともある。肩にかかるかかからないかの黒髪を風に揺らしてかすかに微笑むその女性は確か、同輩にあたる。

しかし、そんなことはどうだっていい。頭蓋には疑問符が満載されていた。

「あ……なんで、ここに、あれ？」

発音すら定かではない、呻きとも問いかけてもつかないこちらの声に彼女は小さく声を出して笑うことで答えた。

そのまま彼女に支えられて、先ほどまでよりは幾分か情けなさの減じた姿を夜気に晒しつつ、レビンは帰路に着いた。

＊

町を一望できる、山の中腹辺りに設けられた公園にいくつかの人影が存在していた。町の光も大分落とされ、自動車や工場の出す騒音に変わって木々がざわめき猛禽が鋭い泣き声を山中に放射している。冬の真夜中であるにも関わらずその影たちはひどく薄着である。シンプルなシャツやスラックス、薄手のスカートは良く見てみればどこかの学校の制服であった。

それらのうちの一人、腰まで届く長く美しい髪を優雅にたなびかせて、セーラー服に身を包んだ女が呟く。

「いい町ね」

木々の間に広がる暗がりにしみこむようなその声に、別の声がこたえる。

「やっぱり彼で決まりかな？」

小柄な女だった。長髪の女と同じ服に身を包んではいるが、醸し出す雰囲気はまるで異なっている。軽々しい口調からは、淡泊な不気味さが伺える。

「決め付けてしまうのはまだ早いよ…もう少し待ってみようじゃないか。なあ？」

またも別の影が、答える。こちらは男で、長身且つ痩身であり、顔には憎らしいほどに優雅なアルカイックスマイルを貼り付けていた。

「誰か候補がもう少し出てくれるといいんだけど……」

「僕は誰だっていいですよ。そんなに変わらないんですから」

「そんなことはないわ。優れた資質はより深く私たちを見つめることが出来る」

いくつかあがった気の弱そうな声に、最初の女が反論する。その剣呑な空気を察してか、これまで黙っていた最後の一人が割ってはい

る。

「まあいいだろ。あと十日だ。それだけ待って言ってただろ」
その声にそれぞれが押し黙る。狙い済ましたかのように木々が風に揺れ、葉を擦れさせてざわめく。押し黙った六人の周囲が、ひどく世界から落ち窪んでしまったような、そんな印象を受ける集いだっ
た。

1・しょぼくれたブルースでも歌いたい そんな気分さ

絶望的な現実から絶望的な睡眠でもって絶望的な夢に落ち、再び
絶望的な目覚めを向かえるとき、そこにどんな未来を描けばいいと
いうのか。

それでもポケットの携帯からけたたましく鳴り響くアラームの『
サンフランシスコ・ベイ・ブルース』が無理やりに覚醒へと導いて
くれる。そうさ、俺は一文無しでもうどうしたらいいのかさえわか
らない……。

レ빈は緩慢な動作で起き上がると、自分の姿を暗澹たる気持ち
で見下ろした。どうやら昨晩は帰ってきてそのまま寝てしまったら
しい。あの女性に支えられつつこのマンションに戻ってきた時には
半分以上意識も無くしてしまい、どうやってこの部屋に入ったのか
も覚えていない。床を見渡すと玄関の鍵が転がっている。どうやら
ポケットに入れておいたものを自分でだしたか、若しくは彼女が無
理やり探してくれたのか……。

そもそも何故彼女はあんなところにいたのか。

レ빈は霞がかった頭を振って、無理やりに思い出した。

彼女———そういえば名前は知らないのだが———は大学においてち
よっとした有名人である。というのも、彼女が大学以外ではれっき
とした有名人であるからだ。どこかの事務所で俳優だかなんだかを

やっているらしく、舞台に映画にと活躍の場を広げつつある期待の新人なのだとか……。

ふと思い出して部屋にたった一つの机の上に目をやる。天板の上に乱雑に置かれた紙束の中には繁華街でとってきたフリーペーパーの類が幾つか混ざっている。その中から上品な装丁の一枚を抜き取ると、そこには目を閉じた、彼女の美しく繊細な横顔が写し出されていた。

『十一月二十七日公演　カタコンブ・死者とともに死者の言葉を持って』

どうやら前売り券の宣伝らしい。日付はとうの昔に過ぎていた。タイトルからして難解な舞台だろうと説明書きを見ると、案の定ロシア産の歌劇だった。

主演女優の名前は、ルーツと書いてある。主演女優というのは彼女のことに違いないが、ルーツというのは芸名のような物だろうか。どうやら思った以上にその筋では有名人らしい。海外の評論家の推薦コメントまで乗っていた。

「すげえな」

投げやりに呟いて、風呂場へと向かう。兎に角すっきりとしたかった。

壁の時計に目をやると昼の二時を回っていたが（おまけに平日であつた）、大学の四年とはあらゆる意味で自由度が高い。忙しくしようと思えばまともに寝れもしないだろうが、レ빈はそういったあくせくとした生活とは今のところ無縁だった。週に三度ほどしか大学に足を運ばなくて良いのはこの歳まで生きてきて得ることの出来た数少ない甘美さの一つだ。そんなことを思いつつ、浴室に入る。蛇口を捻り、景気良く頭からかぶる。

温度のことに頭が回らなかったために真水を滴らせることになり、レ빈は小さく悲鳴を上げた。

「へぐしっ」

漫画のようなくしゃみをしながら、パソコンの電源を入れる。

(風でもひいちまったかな?)

寒空の下しばらく地に伏していたからか、それとも先ほど全身に奇襲をかけてきた冷水のせいか。手を額に当ててみるが、良く分からない。考えてみれば、自分の手で自分の額の温度を測るということ自体、無理があるのかもしれない。

陰鬱な機動音を響かせつつ窓が立ち上がる。キエフの威圧的な大門が背景に設定された見慣れたデスクトップ。

ブラウザを起動して、適当にウィルスソフトを更新しつついつものページへと飛ぶ。

N I C O N I C O 動画 (Black board)

マイページに並ぶのは、自らがアップロードしたとあるゲーム実況動画の数々。平均再生数はゆうに万を超え、コメント、マイリストともに大人気動画のそれを示していた。

「……………」

無言で小さく息をつきつつ、その中で最も新しい物をクリックして視聴する。レビンが実況者として有名になった代表作。学校であった怖い話。

終盤、美しい歌声が物語を締めくくる辺りで、視聴者からのコメントは次回作の希望へと変っていく。

様々なタイトルを希望する声が溢れ、レビンの自由意志を尊重しようとする派閥などもちらほら出てきた辺りで動画は終わりを迎える。コメントの中には、最後に動画を投稿してからの空白期間が長すぎることから、引退説をまことしやかに語る者もいた。

学校であった怖い話に屈しないシリーズが終わりを迎えて半年間。レビンは何一つ実況動画を上げていなかった。特に忙しかったとい

うわけでも、機械に不調があったというわけでもない。ただ――
（ただ、こんなことしてても空虚なんじゃないかって、そう思ってしまっただけだ……）

大人気のうちにシリーズが終了し、レビンのうちにあった熱も綺麗に取り去られた。冷静になったあとには、ただ疑問が残るばかりだった。俺は何をしてるんだ。

（要するにモチベーションが上がらないって事なんだろうな）

そんな妙にいっぱしのような生意気なことを考えて、嘆息する。

パソコンの画面から目を離し数時間前まで眠りこけていた布団に視線を向けると、ちょうど掛け布団に隠れるようにして一枚の小さな紙切れが堕ちている。

「これは……？」

手にとってよく見てみると、そこには適当に書き殴ったと思しき（そのくせひどく綺麗な）筆跡でこう書かれていた。

“ あったかくして寝ろよ！ ”

しばし見つめて、首を捻る。

昨晚この部屋に自分を運び入れた彼女の書いたものだろうか。それくらいしか心当たりが無かった。

今更のように、猛烈な恥ずかしさが体を駆け巡る。自分の部屋を女性にあまりにも無防備なままに見せてしまった。特に何が恥ずかしいというものではないが、ここ数日すっかりとした掃除もしていないのだから、顔が熱くなるのも仕方ない。

今朝から、若しくは昨日から何度目か分からない大きな溜息をついて、レビンはもう一度卓上のロシア歌劇のチラシを手にとり呟いた。
「礼くらいは、言っとくべきなんだろうな……」

＊

翌日。

街中を自転車で駆け抜け、寒気を切り裂きつつ大学へと到着する。朝の清涼な大気が充溢した——といったほどに早い時間ではないが、まだ十時ほどである。こんなに早くに登校するのは久々だった。

あまり混雑してない駐輪場に愛車を引っ掛けて、本館に向かう。

ホールだの食堂だの外語センターだの色々ある建物の中で、この本館というのは生徒へのインフォメーションが行われたり簡単な授業に使われたりするところだ。

「さて、と……」

レビン自身この場所に何か特別な用があるわけではなかった。この日は午後からゼミでの卒論の進捗報告があるだけである。

（それまでに見つかるかな）

ポケットから昨日布団に置かれていた紙切れと、チラシを取り出す。これまでは気にとめていなかったが、改めて考えると有名人が自分と同じ大学にいるというのは変な気分である。

もっとも今日来ているのかは半ば賭けになってしまっているのだが。

「どうするかな」

少し考えてから、携帯を取り出して適当に暇そうな友人にダイヤルする。

（有名人らしいからな。手当たり次第に色んな奴に尋ねていけばすぐ会えるんじゃないか？）

行き当たりばったりそのものだが、会えなければそれまで、である。なんとなく会いに行こうと思ったのは、まさしく何となくとしか言いようが無い。

何人かに連絡を取り、食堂に集まって話を聞くことが決定したら、レビンはタバコを取り出して口にくわえた。

（本当に、なにやってんだろうな）

渴いた思念は、同じく乾いた冬の空気に押し流されていった。

「つまりだな、お前さんが持つてるそのチラシの劇は、そもそも

元はオペラなんかじゃねえんだよ。ってかそのタイトル聞いてピンと来ない時点で非常識余りあるってもんだ。『展覧会の絵』って聞いたこと無い、のか？本当に？まあいいや。ともかくロシア生まれロシア育ちで今はロシアの土に埋まってるだろうある音楽家、ムソルグスキーって奴が亡くなった友人で画家兼建築家の野郎の展覧会の様子を五線譜に書き連ねたピアノ組曲なんだよ。これは印象的だった十点の絵画から書き起こした十曲と、その間をつなぐ五つのプロムナードと十曲からなるピアノ曲だってことだ。で、この劇つーのはその中の二曲を元に作成された歌劇で、その道ではそれなりに名のある舞台作家が書き下ろしたんだとか。しかしここで驚くべきなのはその脚本の大部分に実は我々が大学の期待のスター様の意見が取り入れられてるって事でよ、実は彼女、近々作家としてのデビューも見込まれてるって話で、いやはや神様はひどく才能をお集めになった人間を御造りになられもうしたものだと……おいレビンお前聞いてんのか」

レビンは喫煙席の中空に薄く煙を吐き出して、手元のコーヒーをすすった。タバコが味覚を汚染するというのは本当だろうか……。

「聞してるよ」

「そうか！」

投げやりに嘘を答えると、相手は相当にうれしかったのか顔を輝かせて続きを語りだそうとする。慌ててそれを止めて、尋ねる。

「俺が聞きたいのは、彼女に会う方法、sonだけでいいんだよ。何か無いかな、彼女が受講してる講義とか、大体どこで昼食べるとかさ」

「全く知らない！」

「帰れお前は」

これで三人目だった。

結局五人ほどに話を聞いて分かったことと言えば、彼女の大変な

才覚と人気、あとは少々の奇人ぶりだった。

彼女はその日その日の気分で様々な学部・学年の講義をゲリラ的に受けているらしく（そんなことで果たして単位は一体どうなっているのだろうか？）、また決まった行動のパターンもこれといてないらしい。その美貌と才能ゆえか友人らしき人間は多いらしいが、固定して付き合いをするような間柄の者は居らず、そういった人物を通して連絡を取ることも難しいらしい。

（結局）

搜索をあきらめて、適当な方向へと歩き出しつつ心中でぼやく。

（縁がねえってことなんだろうな。きっと）

ここの所慣れきってしまった脱力感が体に充満していく。実況動画もそうだが、何かが終わったあとにこそ辛い思索の時間は待っているものだ。人間は何かすることが減れば減るほどよく考えるようになる。

空を見上げる。不可解だ。

そう、何もかもが不可解だった。そもそも自分は何を思って実況を始めたのか。娯楽？自己開示？自己実現？それとも何であれ有名になりたかった？くだらねえ。

何故俺は実況に向いているのか

（何、考えてんだ）

我に帰る。辺りを見回せばそこは裏寂れた建物の前だった。

旧図書館。

昨年から建造されている新たな大学図書館が完成し、今では蔵書のほとんども移転され取り壊しまでの僅かな期間を数名の職員とともに過ごす、死にかけの直方体。

と、レ빈は耳を微かに振るわせる、済んだ歌声に気が付いた。先程まではまったく気が付かなかったが、綺麗な冬の空気を通して曇りの無い声が踊っている。

注意して聞いてみると、それは上方より聞こえていた。

しばし迷ってから、午後の授業を諦める気で図書館へと入る。

節電のためなのか、室内は薄暗かった。受付の立派なカウンターには今では中年の女性が一人座しているのみである。その女性はこちらにちらりと片目で視線を向けると、すぐに手元に視線を戻した。この受付の女性は既に勤続数十年といわれる古老で、誰もめったに声をかけない代わりに誰にもめったに声をかけては来ない。顔面には深く彫りこまれた皺と左右で形の違ういびつな眼球がぎよりと光っている。レ빈は心の中でこいつに対して伝説の妖婆『バーバ・ヤガー』の名を与えていた。きっとこいつは鶏の足の上に立つ小屋に住む恐ろしいババアだ。近寄らぬが吉と決まっている。

バーバに生徒証を軽く見せてから奥に進むと、すぐに階段がある。迷わずに最上階を通り越して屋上に出るドアへと向かう。普段は施錠されているはずだったのだが、何年か前に鍵が壊れてそのままだと聞いたことがある。

ノブに手をかけると、予想以上にあっさりと扉が開く。重い金属扉を押しのけてレ빈は屋上へと歩み出た。

歌声が出迎えてくる。

彼女が手を振るだけで

俺の人生は変わる

誰も否定できないさ

そこには確かに“ なにか ”がある

二日前の夜に醜態を晒してしまった相手、あの女性がそこにいた。ほっそりとした肩や手足などはどちらかといえば少女と呼ぶべきだろうか。

彼女はすぐにこちらに気がつき、面白そうに微笑むと、サビに入った。

遠くから聞いている分にはただ清潔な声に思えたのだが、近くでしっかりと耳にするそれはむしろクリアな迫力に溢れていた。滅菌しつくした刃物のような歌声がその場ごとこちらの体まで切り裂き

背後に透過していく、そんなイメージが頭に浮かぶ。

圧倒され、呆けているうちに歌は終わっていた。自分がただ口をあけたまま彼女を見つめていることに気がついて、照れ隠しに軽く頭を振ってからレビンは声をかけた。

「や、えーと、何だ」

「こないだのお礼かい？」

先を越されてしまった。何か気の利いた返し方は無いかとしばらく言葉を搜してから、諦めて溜息をつく。

「そんなところかな」

くつくつと彼女は笑い、それから今度は問いかけてくる。

「何であんなところで倒れてたんだい？ 野良犬じゃあるまいし」

「知り合いと飲んでて、飲みすぎちまって……まあ、馬鹿やったって言うのかな。その、有難う。それと悪かったな、ほんとに」

その言葉を聞いているのかいないのか、彼女は笑うのを止めてじつとこちらを見つめていた。そろそろこちらが耐えられなくなるというところで彼女は視線を外し、口を開く。

「いや……別にいいさ。それよりも、こんなところで話すのも何だ、場所を移そうか」

いきなりといえはいきなりな提案に面食らう。彼女とは初対面ではないが親しくも無い。てっきり一言二言言葉を交わして終わりのつもりでいたのだが。

「別にいいけど、どこへ？」

「君、時間はあるかい？」

「あるけど」

講義はサボタージュしてしまったし。

「食堂へ行こう」

決まりだった。

＊

昼過ぎとはいえ、まだ一時過ぎだ。食堂は繁盛しているようだ。た。

窓際に空席を見つけた二人はそれぞれの昼食を挟んで向かい合うように座っていた。

彼女はこの寒い中冷やし狸を一心に啜り、その向かいではたらこスパを適当につつく自分がいる。

(……気まずいな)

何せ眼前の少女はめっぼう綺麗である。美人と面つきあわせることなど、無いわけでもないのだが、やはり珍しいことだ。

「ごちそうさま」

まだ食べ初めて十分ほどだというのに彼女はすでに食べ終えてしまったらしい。水を軽くなめて、顔を上げる。

「おや、遅いね」

こちらのスパゲティの残りようを見てそう言ってくる。あまり食欲もわかず、まだ半分以上残っていた。

「食べる気、あんまりしなくてね」

「そう。じゃあ良かったら私が貰おう」

まだ喰う気か。

(さて)

どうやって話を切り出そうか。いやそもそも何か話があって会いに来たわけではないのだったか。礼は一応言ってしまったし。

フォークの先を見つめながら考えていると、彼女から切り出してくる。

「実を言うとね」

見事な黒髪を指先でいじりつつ、深い色をした瞳がレビンの視線を捉える。

「私も君を探してたんだ」

行ってる意味がわからなかった。

「そっち、も？」

「うん。それでこないだは路上で君を見つけたんだけど、ともに

話せる状態じゃなかったからね。今日は会いに来てくれてびっくりしたよ」

二日前の真相がやっとハッキリする。だが、肝心な部分は全く分からない。

「何で俺なんかを？」

あんたみたいなスターが。と、これはさすがに飲み込む。

「君さ、『レビン』でしょ」

言われた瞬間、顔が引きつってしまう。

（まずい、いや別にまずいことはないのか……？）

レビンというのは、ニコニコ動画内で使っている名前である。勿論本名ではないが、人気実況者となるにつれてそれなりに親しみの沸いてきた名前である。

電子ネットというのは、その広がりは無秩序さゆえにそこに個人が接続する際には匿名性が重要になる。ネットが広大であればあるほどその匿名性が破られた際の衝撃というのは大きいのだ。例えばましさや危険さが無くとも驚きは残る。

「前にここ、大学で話したことがあるよね？ゼミ選択のときだったかな？とにかくその時に声を聞いて覚えてたんだよ。すごくいい声だったから」

先程図書館の屋上で美しい曲を奏でたその声でそんなことを言う。

レビンは柄にも無くひどく照れそうになって、小さく咳について誤魔化した。

「それから数ヶ月前、『怖い話に屈しない』を見てね。びっくりした。あんなに面白い実況始めてみたよ。とにかくそれで、レビンが君だって分かった」

「前に話した、って、ほんの一言二言じゃなかったっけ？」

そんなに長期間、正確に覚えていた上で、劣化したネット上の動画の音声と照合なんか出来る物なのだろうか。

「出来るよ」

に、と長生きした黒猫みたいな笑顔を浮かべて彼女が言う。

「私はプロだからね。声は聞き間違えない」

そんなものだろうか。自信に満ちた彼女の表情を見ると、簡単に納得してしまいそうになるが。

「なんだか、これは恥ずかしいな」

「恥ずかしがるような出来の物でもないだろうに」

「出来とはまた別だよ」

「別な物か。むしろ誇ろうじゃないか」

「たかが一趣味だからなあ……」

「趣味ゆえに、だよ。作家志望君」

「分かっていると思うけど、それはネタだよ」

こちらが一言発すれば、小気味良く言葉が返ってくる。さすがプロ、といったところなのだろうか、はきはきと発音良く話す彼女は、思っていたよりも話しやすかった。

「くっくく……いやしかし、一度話してみたかったんだよ」

「そんなに入れ込むようなことかな？」

「特別気にするようなことなんだよ。…私には、ね」

そう言って彼女はこちらの手元からフォークとたらこスパをするりと抜き取って、さくさく消費し始めた。

＊

パスタが胃の腑に落ちるまでの数十分と食後の数十分、あわせて一時間ほど、レビンとルーツは他愛ない話に興じていた。音楽、映画、様々な作家たち。話題は多岐にわたっていた。

そろそろ食堂も空いてきたという頃合になって、不意打ち気味にルーツが聞いてきた。

「…それで、何か次にやる実況は決まったの？」

返答に詰まる。そもそも次のゲームや何かをあまり考える気にならないと言うのが原状だった。

「いや……」

仕方なく濁す。が、彼女は諦めきれないようだった。そこで少し考えてから、苦し紛れに思いつく。

「ああそうだ、今度の魔界村実況対決って企画に参加するつもりだけど」

「へえ？それは何なんだい？」

「魔界村の実況を各自一本ずつ持ち寄って、マイリスト数で勝者を決めるって企画だよ」

「ふうん？おもしろそうだね」

鋭い笑みでそう答えてくる。どこと無く楽しげな雰囲気を出しつつ、彼女は食器の乗ったトレイを手を取った。

「済まない、そろそろ講義があるんだ」

レビンが食堂にただ一つの簡素な壁掛け時計を見ると、既に午後二コマ目の講義が近づいていた。

自らもトレイを持ち、席を立つ。

「楽しかったよ。機会があればまた、話そう」

「ああ、また」

テキパキと片づけを終えると、彼女は足早に食堂から出て行く。

少しの間、何の余韻か分からない余韻に浸ってから、レビンも外へと歩み出る。

ちらりと一瞬だけ彼女が去って行ったほうへ目をやると、しっかりと背筋を伸ばしてかすかに髪を揺らしつつ離れていく後姿が見えた。

日々がただ茫洋としていくように感じてしまうのは、誰しも何度かは体験することの一つだ。

（俺が感じてるこれもそうなんだろうけど）

実況を含めた諸々への距離感。

それが彼女との出会いによって、良くも悪くも転機を迎える。そんな予感がして、レビンは身震いとともにその場を離れた。

*

結局、講義の無い大学になど用はないのだ。サークルに精を出す人間は半分学生ではなく、学業に精を出す人間は半分人間ではない。つまりどちらもそこそこな自分は人間であるということか……。

（馬鹿か）

あの後には特にやることも無く、来週もまたでなければならぬ、本日サボった講義でどのような釈明をするかを考えつつレ빈は自宅に帰ってきていた。

着替えを済ませ手と喉を洗い、人心地ついてからパソコンの前に座る。

「おっと」

せっかくだからと冷蔵庫から酒も取ってくる。適当に選んで掴んだのは、『万魔殿』と恐ろしい書体で書かれた紙パックの日本酒だった。アルコールのほかにサタンやその僕たるチェラブなどが混ざっていないかをパッケージの原材料欄で確認しつつコップに注ぎ、先ずは一杯。

辛味と苦味を舌で転がしつつ、パソコンを立ち上げる。

半ば習慣化した手順でブラウザを立ち上げついでにメールのチェックも済ませ、取り敢えずはニコニコのゲーム動画一覧へと移動する。

「魔界村か……」

既に幾つか実況対決用の動画がアップされていた。有名な実況者たちがこぞって参加する大きな催しにいつの間になっっている。

（ああはといったものの、な……）

ルーツ相手には参加するといった物の、レ빈はその動画をアップどころか撮影自体してはいなかった。そもそも自由参加が可能なこの企画に、レ빈はそれほど意欲的ではなかったのだ。

（別に何が何でもやらなきゃいけないわけでもなしに、か）
しかし。

別れ際のルーツの、猛禽のような鋭い笑みが記憶から浮かび上が

ると、そういった適当な選択肢も脳裏から排斥されてしまう。

「別に適当でもいいさ」

長く触っていなかったせいで少々埃をかぶってしまっていたマイクを掴み、キャプチャーソフトを起動する。機械の中に耳と目だけを置き去りにして声を出す、そんな感覚は久々だった。

生身で視聴者を感じたのは、ルーツとの出会いが初めてだった。

＊

出来上がってみれば、何のことは無い、いつもと変わらない出来の動画だった。モチベーションなど費えつつある身を鑑みれば、よい出来だといってもいいだろう。

マイクを外し、ファイルをエンコード用のソフトにかけて一息つく。

無性にタバコが吸いたくなったが、手元にまだ酒が残っていたのでそいつで我慢する。

頭が疲れている。血の巡りは悪く、クリアな意識がどこか遠くに行ってしまった。

（俺は、実況が、したいのか……いや）

まどろんだ意識は、取り留めの無いことを無意識に考え始める。

（実況動画はどこから来て、どこへ行くのか。そもそも実況とは何なのか……）

どうやら酒が体に合わなかったらしい。普段より少量しか飲んでいないにもかかわらず、気分が悪くなり、また眠くもなっていた。エンコードの終わった動画ファイルをニコニコに放り込んで、布団に横になる。

こういった場合無理に起きると体調が悪化しかねない。

居酒屋での反省を生かして、レ빈は浅くざらついた眠りへと身を任せることにした。

＊

翌日レビンを起こしたのは、またもや『サンフランシスコ・ベイ・ブルース』だった。しかし今度は携帯電話のアラームではない。繊細なポールの歌声は聞こえず、かわりに良くも悪くも陽気な女性の声が、音程もリズムも滅茶苦茶にがなりたてている。さらに玄関の扉を拳で打ち付ける振動音が頭を揺さぶっていた。拳で、と分かるのは、以前から何度かあったことだからだった。

「あい・どんとぎぶあおうしいなんたらあんどいふしーねばーなんたらかんたら！」

「うるせえ！」

耐え切れず飛び起きて、玄関に向かってしんすけもかくやといった感じで叫ぶ。

一瞬沈黙してから、扉の向こうの声は一転悲しげにすすり泣く真似をし始めた。

「餓死するよう……助けてくれよう」

溜息をついて、立ち上がる。時計を見ると、十時を回ろうとしていた。

「また飯の催促か。うちには何にも無いって」

「うう……流し台下扉、中華鍋の隣のチキンラーメン……」

何で知ってんだ！

仕方なく観念して、扉を開けてやる。

見ると、インターホンにしがみついた小柄な人影がこちらを向き、呆れるほどに明るい笑みを浮かべる。

「おはよっ！」

「…おはよう」

薄手の柄シャツに白いパーカーを羽織っただけの軽装。このクソ寒い中……と心中で別の意味で感心するレビンを他所に、急いで家の中へと入り込んでくる。地毛でも栗色の髪が、せわしく動く小さな頭に合わせてふわふわと動いている。

「おお…二袋も…ブルジョワじゃ。ブルジョワ様じゃー！」

「いいから二つとも持ってこうとするなよ！ほら一つは置いてけ！」
「搾取だー！」

この女はレビンの高校時代の後輩で、大学も同じところに通う、腐りかけの縁がある間柄の相手だった。バイトの給料日から数えて平均十日で食費まで使い果たしてこうして無心に来ることを除けば、賑やかで良い後輩である。

流し台下の収納から取り出した獲物を抱えて、満足げにサインペン（当然俺の家のだ）で名前を書くそいつに、冷蔵庫から幾つか余り物の野菜や卵を袋につめて渡してやる。『すぎる』としつかりと記したチキンラーメンの袋を床において、そいつがレビンに向き直り合掌し、更に念仏を唱えつつ十字を切って五体倒地するその辺りでレビンは止めに入った。

「で、今日は何なんだ？今月に入って二度目じゃないか？」

「うう、そうだけど。今月ほんとに厳しくて」

「まったく……」

欠伸をしながらそいつ、すぎるに背を向けて居間に戻ろうとすると、背後からリズムカルなステップの音が二度ほど響く。

「ん？」

振り向くと、眼前に彼女のつま先が迫っていた。

「うおう！？」

上体を斜めに逸らして飛び蹴りを何とかかわすと、すぎるは器用に両足同時に着地して不敵な笑みでこちらに振り向く。

「ふふふ…背を晒したおぬしの不覚よ」

「追い出すぞ」

「ごめんちがうんだよれびんふざける為だけに来たんじゃないんだよ！」

「じゃあなんだよ」

「ん？いや、えっとね」

すぎるが口ごもるのは珍しかった。常時脳内麻薬のチャンネルがオ

ーブンしっぱなしのこの少女は通常思い付きから発語まで百分の一秒かからないような奴だ。

「まあいいけどさ。ほら、適当に座れよ」

その辺に散らばっていた座布団をすぎるの方へと寄こして、レビンはパソコンをスリープモードから起こす。昨晚アップしておいた魔界村を確認するため、実況対決のマイリストへとリンクを辿りジャンプする。

（まあまあか）

慣れというものは怖いもので、万単位の再生を見ても驚愕しなくなったことにこそ驚いてしまう。やる気の無さとは裏腹に、魔界村はそこそこ講評だったようだ。対決の中でも上位に名を連ねるに違いない。

「それあたらしいやつ？」

背後から声がかかる。すぎるが大きな目を興味の色に染めて覗き込んでいた。

「ああ」

実際の知り合いで実況をしていることがばれているのはルーツを他にすればすぎる一人のみである。

「へえ……」

なんだか含みのある声で納得しているさすがに置いて、他の実況者を確認する。さすがに上位は錚々たるメンバーである。と、気付く。

「ん？」

自らの動画の三、四個下、そこに、ある意味で聞いた事の無い、そしてまたある意味最近になって聞きなれた響きの名前があった。

“ルーツ 初実況で参戦”

しばらくの間、困惑と混乱、驚きが混ざって固まってしまう。それでも指は動画をクリックし、再生画面へと移していた。

投稿日時は今朝早くになっていた。ルーツがこの対決企画を知ったのは、恐らく昨日。だとすればそれから準備して、ぎりぎり今朝上げたのか……？

スピーカーから実況音声流れ出す。始めてであるなんてのは誰が信じるんだろうか。朗々と響き渡る声で、轟然と語りだし、一瞬で視聴者を引き付け、繋ぎ止め、その上で奇妙な浮遊感、開放感を抱かせる。

歌のときとは違う、今度は優しく頬を撫で、知らぬ間に通り過ぎてしまうような靈感に満ちた声質。峻烈さと優しい安定感がたった十分二十分の動画内に綺麗に並び、クラシックの楽曲のように狙い済ました上でこちらの感性を貫いてゆく。

自分が息まで止めているのだと気がついて、レ빈は小さく咳き込んだ。

「あ、これ……」

レ빈の驚きを知ってか知らずか、すぎるが控えめに呟く。

「知ってるのか」

「うん……いや、その知ってるというか」

ほんの少しだけ中空に視線をさまよわせてから、思い切ったように言ってくる。

「あ、あのね！？昨日、私大学いったんだよ」

「おう。大いに励め」

「そうじゃなくて！それでね？お昼に食堂に行ったんだけど、そこでれびんが一緒にいるの、見たんだよ。その……ルーツって人と、多分、一緒に居た……よね？」

「ああ、そうだけど？」

即答すると、すぎるはほんの刹那の間だけ目を見開いてから、先程渡した食料袋より四分の一にカットしてあるキャベツ（ラップ包み）をオーバースローで正確に投げつけてきた。角の辺りが頭に衝突し、中途半端な痛みを感じる。

「なにすんだよ！」

「そ、そうだけど!?!? そうだけどって、……わ、私が誘ってもこないだ断ったじゃん!」

「いやあれは講義があったからで」

「昨日だってあったんでしょ?」

言い返す言葉が無い。

「私は一緒に食べたこと無いのに、全くもう」

「だってほら、お前良くここで一緒に飯くらい食ってるだろ?」

「そういうのとは違うの!」

何が何とどう違うんだ。さっぱり分からない。

「もういいよ……それで、何であの人がこんな動画作ってるの? れびんが誘ったの?」

なんだかどうしようもない哀れな大衆を見る聖人のような顔で訊いてくるすぎるに戸惑いつつも、レ빈は答えた。

「まさか。俺も驚いてるよ」

「怪しいなあ。だってれびんと話してた次の日でしょ。そもそもなんであのルーツさんと、一緒にご飯なんか食べてたの?」

「それは不幸な記憶にまで事の始まりを見に遡ることになるというか」

口ごもり、誤魔化そうとする。良く考えてみれば誤魔化す必要なんて全く無いのだが、それでもレ빈は何と無しに遠まわしな言い方をしていた。

「はあ……もういいよ。昔はおねえさんに何だって話してくれたのにねえ……」

誓ってそんな覚えは無い。そもそもお前は年下だろうに。

「でも、何であれまた実況をれびんがやってくれたのは嬉しいな」

「あれ、もしかして見てるの?」

「当たり前だよ!」

なんだか気恥ずかしいものである。近しい人間、それも距離感の無い友人に見られるというのは特別恥ずかしいように思う。

「そ、そう。それは取り敢えず、有難う」

「ん」

短く答えてぷいとそっぱを向いてしまう。何だろうか。表情が良く見えない。

そんなやり取りをする頃には、ルーツの実況動画も終わっていた。コメントを見る限り反応も上々で、完全な新人での参加ながら多くの評価を集めている。

確かに鮮烈な実況である。そもそものが声学、実践に長けたプロ役者のためか、素人の実況とはまた一味違う、別世界の魅力がある。既に取り込まれてしまっている。

レ빈はそのことに気が付きながらも、それを勤めて無視した。それが恐ろしいことだと直感し、無意識で避けた。

「綺麗な声だね……」

「……ああ」

リピート再生しつつ答える。

（明日になったら……また会いに、行く、か？）

訊いてみたいと思った。何故こんな、こんな爆弾を落としていったのか。

画面に釘付けになったレ빈をやや不満げに横目で見つつ、すぎるは悩ましげに息をついて、荷物をまとめだす。キャベツを袋につめなおして、玄関へと歩き出した。

「あれ？もう帰るのか？昼くらい食っていけば――」

「いらないよ」

今日のすぎるは変だった。例えば、レ빈に対して時々こういった吹っ切れていない、半端な態度をとるときがある。これまでレ빈が気にしたことは無かったのだが。

「今日は帰る。れびんはルーツさんで忙しいみたいだし、ね！」

足早に部屋を出て行くすぎるの後姿が、心持ちしょんぼりとしていた。

「なんなんだ……？」

レ빈は困惑の声を上げつつも、また無機質な液晶画面へと視点を

戻す。そこにはやはりルーツの魔界村。

実況での一つ一つの言葉が頭の中で溶け合い混ざり合い、一つの単純で複雑な感覚を形成する。人は言葉で伝え合うが、伝達の本質は言葉の音や文法、単語ではない。意味伝達の中核をなすのは、言葉で外面的に意味を指し示すことによる、感覚の共有だ。

それは歌に似ていた。

それから気が付けば五度も動画を再生し続けていたことに、レビンは気が付いた。

＊

「ちょ、ちょっと待ってよ！まだ誰も見つかってないじゃないか！」

「悪いね。ぼくは彼が気に入らないんだよ。ずいぶんと僕のことを嫌っているようだし……それに候補ならもう一人、良いのが居るじゃないか。飛び切り美人だしね」

町の片隅、証券会社と小さな菓子屋のビルの間の路地の突き当たりに、太った男と、それとは対照的に長身痩躯の影が、向かい合って立っていた。

太ったほうが困ったように返す。

「で、でも岩下さんや新堂君だってただ観察してるだけでいいって……干渉して決めちゃうのはよくないよ」

「うるさいなあ君は。あのね君、ろくに考えてもいないくせに他人を引き合いに出して反論するのは、そもそも反論になっていないんだよ。それに君だって彼よりも他の、綺麗な女性のほうがいいんじゃないか？」

「それは確かに……そうかな」

「ほらみたことか。じゃあ、僕は行くからね。皆によろしく」

そういう終えた瞬間、細い方の体が一瞬間に染まり、その場から掻き消える。

あとに残された太い方は数秒その場で困ったように辺りを見回し、やがて肩を落として適当な方向に歩き始めた。

その様子を、一部始終ビルの上から眺めていた男女二人組みには気が付かずに。

「あーあ。やっぱり勝手に行動しちゃったよ。岩下さん怒らないかな？」

「さあな。選ばれた対象が十分な奴ならきつと怒らないだろ。そうでないなら刺し殺しちまって終わりだ」

「そしたらまた次、か。変りばえないよねえ」

「仕方ないぜ。困惑や驚きから出る謎は、尽きることが無いんだからよ」

そこまで話して、ビルから二人の姿も消える。

静寂を取り戻した町の一角は、見ようによってはひどく安堵しているようにも見えた。

2・お前のためにこんなブルースを歌う羽目になっちゃった

今日のバーバ・ヤガーは一心不乱にワープロに向かって（決してパソコンではない）何かを打ち込み続けている。何を書いているのだろうか。恐らくは身の毛もよだつ事なのだろう。誰某の庭には赤子の物と思われる骨が十八人分見つかったのです……。

しばらくその様子を遠巻きに見ていたレビンだったが、バーバその人が渴いた自分の指先の皮膚を噛み千切る辺りでさっさと退散することにした。刺激してはならない。

バーバの鎮座するカウンターの前をそそくさと通り過ぎ、二日前と同じように屋上への扉まで上り詰める。

特に何か約束などをしてはいるわけではなかった。ただ、会えるとしたらここしかないような気がしたのだ。

一度ノブに手をかけてから、レ빈はそのまま扉に耳を当てて意識を凝らしてみた。

風に乗って、せせらぎに合わせて、感覚はどこまでも伝播するらしい。

分厚い扉の向こうから微かに歌が聞こえた。

そうさ

俺は一文無しで

もうどうしたらいいのかさえわからないけれど、彼女さえ帰って来てくれるなら

またこうして二人

歩いて行ける

笑っていいのか驚かなければいけないのか分からない。レ빈は昨日もこれを朝から聴いていたのだ。サンフランシスコ・ベイ・ブルース。

ゆっくりと押し開ける。

「待っていたよ」

高貴な天使たちが、敗走する墮天使たちを聖なる雷で打ち据える直前というのは、こんな余裕の籠った声になるんじゃないだろうか。

「それはどうも」

笑みを浮かべてレ빈は答えた。さしずめ俺は美しい歌声を止めてしまう無粋な智天使といったところか。

「私の魔界村実況は見てくれた？」

「ああ」

「そうか」

満足げに頷く。当然の反応だったのだろう。そういった自信が見える。

「何であんな物を？」

プロ役者の君が。

当然の疑問だった。出来合いの作品を半端な素人がただ実況すると言う、その意味では極めてシンプルで、芸術性など宿るはずも無いゲーム実況に、プロ役者なんぞが関与する理由が知りたかった。

「ふふ」

短く笑ってから、ルーツはかすれた音を立てて靴底を滑らせ、レビンに近づいてきた。

「考えてることは大体分かるよ」

お互いの思いが読め合いそうになる距離という物があればそれがこれである、そういった近さまで接近してから、そう言うってくる。

「何から話せばいいのか……私はね、レビン」

一拍置く。彼女の眼球から放たれる不可視の光につなぎとめられて、レビンは瞬きすら忘れていた。

「ゲーム実況という物はね、難解なものだと思うんだ」

一瞬、言葉の意味を理解し損ねた。

「人間には様々な表現方法というものがある。絵画、小説、歌、詩、は言うまでもないし、漫画、演技、動画、武道、あるいは数式や、己の身体で表そうとするものもある。だが全ての表現形式は同じ、決定的な欠落を抱えている。全ての表現法は不完全なんだ。この世に存在する表現はこの世を、若しくはこの世と同じほどに広大な世界を表すためにはどうしたって足りないんだ。だからこそそれを成そうとする者は必ず苦勞する。天才は苦勞はしないが、スランプがある。いいかい、一つでも完璧な形式の表現方法があったのならば、誰であれ完全なものを作ることができるんだ。それは既に個々の作品と呼べないものになる可能性すら秘めている。表現の完全性とはそう言うことだ。この世を表しきってしまうのが完全な形式の必然的に行き着くところだ」

すらすらと自論を述べるルーツを前に、レビンはその意味をどうにか理解しようと身じろぎ一つせずに聞いていたが、やや弛緩した脳神経はやや働きが足りなかった。

「そこに来てゲーム実況というのは非常に微妙な立ち居地にある。」

数ある芸術やその他の表現法に比べて、その可能性は先にゲームがあるという時点でひどく狭いものになってきてしまう。実況者の個性は多種多様だろうけど、『表現する』という共通項の上にもう一つ『実況する』という括りがある以上多様性を生み出すのは困難だ。更にゲームという概念を解せない人間にはまるでそれが何物なのか、理解どころか感じることも出来ないだろう」

「なんだかあんまりな言い様だ。」

反射的にそう思ってしまう。同時に、たかが趣味でやってるお遊びじゃないか、と自分のどこかが呻き、違う部分の自分がその言葉に対して警鐘を鳴らし、反感を顕わにしていた。

「ただし」

みると、ルーツはいかにも嬉しそうだった。生き生きとした瞳は、思わずどきりとしてしまうような、純粋な美麗さに満ちている。

「ゲーム実況は、鋭さにおいてはピカイチだよ。分かる人には絶大な効果が発揮できる類の表現法だ。そして一度引き入れて感じさせてしまえば、実況者自身の個性が生み出す多様性はやがて究極的な楽しみと味わい深さ、無時間的な感動を与えることが出来る。これは表現者とそれを享受する者共通の最終目的だ」

そこまで一息に語ると、肩の力を抜いてルーツは一息ついた。レビンに対しておくつてきているやや値踏みするような視線は、恐らく理解がどの程度及んでいるか測っているのだろう。やがて、十分だと察したのか、瞼を閉じ、レビンの肩に手をかける。

突然といえば突然の接触到レビンが驚いていると、彼女は目を開き、先程までとは違う色を湛えた瞳をレビンに向けてくる。

「レビン、私は君と実況がしたいんだ」

「……っはえ!？」

思わず喉がねじ切れたみたいで驚いてしまう。

「レビン、聞いて。私はね、生まれた限り善く生きて善く死にたい。善は悪より価値があるから善であって、故に私は善に行きたい。人は自らを、その生、つまり言い換えればこの世そのものを何らかの

形で表現する。それは何か芸術だったりまたは人生そのものだった。りする。だけど私はそこまでたいした人間じゃない。人を自分の善に引き込み、人の善に分け入るような表現方法は持っていないんだ。君との実況を除いては」

もはやレビンの頭蓋の内側は嵐を越えてビッグバン状態だった。大體、そもそもルーツは。

「そ……そんなこと言ったって、高だか実況だぞ？ 高尚なものじゃ、間違っても無い」

「君は芸術に高尚さを求めるのかい？ それは順序が逆だよ。それを高尚足らしめる物はそれ自身だ」

「じゃあ、魔界村を上げたのは」

「君を誘うためだ。君と実況をするには先ず私が実況者でなくてはならない」

「だけど」

何故こんなにも必死に反論めいた何かをしているのか既に茫洋としてきていた。それほどに目の前の少女はエキセントリックだったのだ。

「ルーツは、役者だろう？ 一線で活躍する。既に大勢に認められているじゃないか」

苦し紛れのこの台詞に、ルーツは虚空に向かって奴らは駄目だよ、と小さく毒づいた。

それから眉根に皺を寄せてやれやれといった感じで答える。

「大衆に認められるということと真に価値があるということとは関係が無いよ。大衆はどの時代でも数が多いだけのくのぼうであるものだ。私には――」

目を細めて適当な方角の空を向く。何と無しにその姿には哀愁のよななものが漂っていた。

「私には、役者の才覚はあまり無いよ。何故だか分かるんだ。演技はやらなくても別にいいという感じがするからね。でも」

またもレビンのほうに向き直る。どうやら大事なことを言うときに

は必ず相手の瞳を見る癖があるらしい。形のいい眉と唇は勝気な色に満ちていた。

「ゲーム実況は、我慢ができなかった。君の実況をしてからやりたくてたまらなかった。どれほど忙しくても、疲れていても関係ない。私は多分実況に魅入られているか、若しくは愛されている」

はつきりと言い切る。どこからその自信が来るのかは全くもって不明だったが、力の宿った言葉にレ빈はそこはかない信頼感を抱いてしまっていることに気がついていった。

それでも、矢張り彼女の行動に突拍子が無いことに変わりはない。ゲーム実況に関する理由は一応納得がいくものの、まだ疑問は残っていた。

「それなら、何で俺なんかと？」

「そこは難しいところなんだけれど」

今度は若干思いつくように眉をひそめて（余談ではあるが、彼女の表情というのは良く変る割に一定した印象を与えてくる。その理由は常時浮かべている余裕のある微笑のせいだった）、くるりとその場で回り、こちらに背を向けた。

「何かに惹かれるというのは、多分理由なんか無いんだ。私はレ빈に、レ빈の実況にただただ惹かれたんだよ」

「惹かれた？」

またこちらに向き直る。

「そう。そして、惹かれた限り、その惹かれるという思いが真性のものであるならば、その気持ちを元にした行動は何より優先されるし、それを止めることもできない。これは個人の問題じゃない。どちらかというと、逆らうことの出来ない宿命みたいなものだ。何かが好きだということはそう言うことだろう？好きな食べ物はどうしたって好きで、嫌いなものはどうしたって嫌いだ。理由を問われたでしょう。甘いから好き、苦いから嫌い、では何故甘いのが好きなんだろうか。好きは好きだとしかいいない。私は理由なく、まるで交通事故に遭うかのようにして君に惹かれたんだよ」

前後を知らない者が聞いたら完全に告白にしか聞こえないようなことを真顔で話して来る。一足飛びの論理に苦戦しつつもレ빈は一応の納得を得た。無理矢理に。

いつの間にかやや下を向いていた顔をレ빈が上げると、自分が説明することは全て終えたというその達成感のようなものを滲ませたルーツの顔があった。

間近で見るルーツの顔は、いい意味で心臓に悪い。端的に表現するならそれは、人間では不可能な美を追求して作られた精巧な人形が、人間にしか出来ない動的な、感情的美しさを伴って生きているようなものだ。いつもよりも少し高級な餌を貰える事が分かっている飼い猫のような笑顔を浮かべるルーツを前に一瞬見とれてしまう。その照れ隠しもかねて言葉を紡いだ。

「それで、俺と実況をしたいって？」

「そうとも」

間を置かずに答える。

正直なところ、この申し出は純粹に嬉しかった。自分の実況を気に入ってくれた上で、技術的にも才能的にも恵まれたものを持った人間が共に実況を、と言ってきているのだ。実況冥利に尽きるということもいい。

しかしそれは単純すぎる感情のレベルでの話である。当然ながら立派にプロとして多方面で活躍する人物と実況することには様々な気後れもある。

そもそも、自分にそれだけの才覚があるというのはどうなのだろうか。彼女は太鼓判を押すが、レ빈自身は半信半疑だった。

「考えているね」

見透かされている。何か言い訳をしようとして、言葉が喉の奥でつかえて諦める。

「……考えているような気分で、ただ悩んでいるだけかもしれないな」

苦し紛れの一言だった。

ルーツはその言葉すら予期していたかのような表情で、クスリと笑う。こんな唐突な状況でもなければただ可愛いと思わなかっただろう。勿論目の前の少女がそんなに単純なものではないといくらなんでもレ빈は既に知っていた。

そんな笑顔のまま、彼女は着ているコートの内側に手を入れる。間を置かずにそのうちポケットから取り出されたのは小さな紙箱のようなものだった。

レ빈が不思議そうにそれを見ると、ルーツは空いているほうの手でレ빈の手の平を取り、もう一方の手でそこにその紙箱を握らせた。ほんの少しの間だがレ빈の片手を包み込んだ彼女の手は少し冷たい。こんな寒空の中屋上にいれば当然か……。

ルーツの手がどかされてから、自身の手を開いて紙箱を見る。それは古ぼけたゲームソフトだった。

「ファイナルファンタジー3……？」

言わずと知れた国民的名作RPGの第三作目。当時は今ほどにメジャーなものではなく、ドラクエを賞賛する漫画雑誌などはむしろこれを不当に扱き下ろす事もあった。それが現在では一つの会社となっているのだから皮肉というより他無い。

「プレゼントするよ」

囁く様にそう告げてくる。

「いきなり共同企画というには私はまだニコニコで無名すぎるし、君は魔界村をやったとはいえブランドもあるし何より気力が無い」ひどく的確な批評だった。

「次の実況の題材となるゲーム、私からのお勧めだ。ホントは4が良かったのだけれど、あれはもう凄い羅刹がやってしまったしね」つまり、このFF3で実況をしろということなのか。RPG実況経験に乏しい身としては革新的であるような、それでいてひどく不安定な地盤の土地に足を踏み入れるような、複雑な気分だ。

「私も何か一つシリーズ物の実況を始めるよ。それでそこそこ名が売れてきたら、まず」

「まず？」

「ラジオをしよう」

＊

その日は結局録画はしないまま就寝した。一日に、というよりもたった数十分の間に多くのことがあったためか、何をしていてもそのときのことを思い出したり考えたりしてしまっている。つまりは集中力に欠ける。

今頃ルーツは何のゲームで実況を始めているだろうか――そんなことばかり半端に考えつつ浅い眠りに落ち、目覚めたのは珍しく早朝だった。

カーテンの切れ目から差し込むまだ弱々しい陽光が寝惚け眼にはまぶしい。

やや恨めしそうにしているような気がする携帯電話のアラーム機能をオフにしてから、パソコンを点ける。それからキッチンに足を運び適当にコーヒーを入れる。ざらざらと目分量でインスタントの粉末をカップに入れ、やや少な目の水で溶かす。

それを一気に煽ると、決まってすっかり頭が覚醒する。代わりに激烈な苦味と酸味が喉を支配するが、慣れるとそれも心地いい。

寝巻きのよれたシャツから普段着へと着替えながら、部屋のすみに置かれた少しだけ上等なCDプレーヤーの電源を入れる。

心地いい歌声が温かい風のように部屋に広がる。

『シーズ・ア・ウーマン』が実に賢いあの娘について歌いだす。口笛交じりにそれを口ずさみつつ、レ빈は早速ルーツの動画を探してみた。

「これか」

あっさりと見つかった。まさかのアップロードに魔界村のほうの動画を見たファンたちが歓喜の声を上げていた。

クロノトリガー。FFDQ闘争がまだ収まるかどうかという時期

に、多くのファン、関係者の予想を裏切りスクエア開発のソフトにドラクエのキャラクターデザイナーがデザインを提供した、当時としてはいわば爆弾のようなソフトだった。

シナリオ、演出、グラフィック、システム、BGM。多くの要素が非常に高レベルにまとまった作品であり、ゲーム史にいまだ鮮やかに輝き続けている名作である。当然ながらこの作品のファンは、とんでもない数に上る。

その作品の、実況。

ゲーム実況において名作をプレイするか全く名を知られていない埋もれた作品を発掘するかは、実況者本人の特質や技量によって注意深く選択される場所である。名作は容易に視聴者を呼ぶが、多くの視聴者を満足させるには当然ながらその作分の価値を十二分に味わい、なおかつ凡庸なプレイヤーになっではいけないという制約がある。

逆に無名の作品はゲーム自体の良さによって先ず視聴者の数がある程度決まってしまう。その上で実況者がどれほどにそれを活かせるかが鍵になる。

勿論実況者の実況によってはそんな構造など簡単に崩せる。が、いつでも最高潮の実況が出来る人間などは、いつの世であれ少数にとどまることだろう。

並みの実況者ならばここまでのメジャータイトルでの実況は何であれ少しは臆してしまうものだ。しかし再生数の表示は既に彼女の实況が成功を収めていることを物語っていた。

実際、視聴してみるとそれは良く出来た物だった。

テンポ良く心地よい声質で実況が行われており、プレイ自体も初プレイの初々しさを出しつつ、それでも視聴者をイライラさせない微妙なラインをしっかりと辿っている。

思わず舌を巻く。昨日今日始めたとは全く思えないのだ。

何か身体の奥が徐々に動き始めているような感覚がする。微かな異物感とでも言えいいのか、熱っぽい感触が出口を求めてさまよ

っているような。

熱に浮かされたようにして、レビンは鞆に入っただまになつていた例の紙箱、FF3を取り出した。

マイクを着け、各種ソフトの用意をしてから、ゲームを起動する。久々だった。実況自体もそうだが、空から引っ張られて足の底が勝手に浮かんでいくような期待感や高揚感は、ここ最近久しく味わってない。

「今日は五本撮りだな」

通常そんな無茶はしない。しかし、仕方が無いのだ。

疼く限り、発散してやらなければ収まりはしないのだ。

胸の奥の熱さは。

――気が付けば、デスクトップには五つの動画ファイルが並んでいた。窓の外は昼過ぎから夕方へと向かう明るい光が降り注いでいるし、何も食べていないせいか胃袋はしきりに空腹を訴えてきていた。

長く細い息を搾り出して、パソコンデスクにうなだれる。なんとも心地よい疲労感が体を襲うが、そのまま眠ってしまったては何にもならない。

エンコードに動画をかけてからネットを開き動画を巡回しつつ、自分は彼女の動画にしっかりと付いて行けるだろうか、とそんなことを考えて苦笑する。

ルーツが太鼓判を押してくれていることで、自身の実力がひどくしっかりした物に思えてならないのだ。それは裏返し、ルーツへの信頼に他ならない。

（まだ出会って間もないっていうのに、な）

馬鹿みたいだな、と頭を軽く振ってその想像を打ち消す。疲れきったせいか頭の働きも緩慢になってしまっている。

だから、少しの間気が付かなかった。

ルーツの動画のお勧め欄からジャンプした実況動画、適当に聞き

流していた声が、誰かに似ている。

思い出そうとすると、常に思い出されるべき物事は半分以上想起されているのだという。レビンの脳髄からも、答えは上がりかけていた。

「すぎる…だ」

「呼んだ？」

「うわ出た！」

いきなり沸いて出た小柄なその体躯に驚いて飛び退る。足がもつれて転びそうになり、どうにかこらえる。その一部始終を先ほどまでレビンの座っていた椅子の横に膝立ちしたすぎるが不思議そうに見上げていた。密かにレビンが気に入っている柔らかな栗色の髪が窓から差し込む日の光でいつもより鮮やかに見えた。

「結構前から居たよ？声かけても返事無いから脅かそうと思ってこっそり近寄ったのに五分くらいさっきのままだった」

「…鍵は？」

「開いてたよ。れびんよく開けたままにするよね。あれ直したほうがいいよ危ないから」

だからといって無断で入っていいということにはならないだろう。勿論気が付かなかった自らも悪いといえば悪いのだが。

「んふふ…私の動画、思ったより好評みたいだねえ」

すぎるがレビンの見ていたその動画の再生数やマイリスト数を見て言う。

スピーカーからは快活な声がポケモン金のBGMと共に流れていた。

「ええと、これはやっぱり？」

「そ。私の実況動画」

何が嬉しいのか、胸を張って膝立ちのまま腰に両手を当てて得意そうな顔をする。

——すぎるが実況をしたことは、これまでに一度も無い。少なくともレビンの記憶では今回が初めてである。

「お前これ、どうしたんだ？」

驚きつつも何とかそう訊いてみる。

「えへへ、実は前々から準備だけはしてたんだよね」
初耳だ。

「たださ、何だか緊張しちゃって録画はしてなかったんだよ。でもなんだか」

そこで一度言葉を切る。あからさまにどう言おうか思案していることを表情に出してうむむと唸ってから、先を続けた。

「れびんこないだ久しぶりに魔界村上げたでしょ。それでルーツさんも実況初めてさ、何て言うか、除け者はやだなというか」

「なんだそりゃ」

意味が分からなかった。それを察して、すぎるは肩を落として嘆息する。

「なーんでわかんないかなあ……れびんもうちょっと感性磨いた方が良くない？」

「失礼な」

「とにかく、これで私もれびんと同じ実況者って事！お互いマイリス競い合う中って事！」

どうだ！と言わんばかりに指を突きつけてくる。七分袖のパーカーから突き出た細い腕が健康的に輝いているが、それは無視してレビンは頭を軽いかいて、乱雑に散らかった状況を整理し飲み込む。

「まあ、いいか……。しかし自由な実況だな」

掛け合いをしている中でもずっと流れていたその実況動画のなかのすぎるの声は、正に奔放だった。感覚器官と口が繋がっていると言うか、感覚器官そのものに口を利かせたならばこんな風になるのではないかと思ってしまう。

しかしそんな自由さ、率直さは彼女自身の人格性によって時に非常に笑いを誘い、感心させる動画を作り上げていた。再生数を見てみると、成る程悪くない。今後パートを重ね続けることで用意に人気実況者の仲間入りだろう。

「色々どうやってやろうか考えたんだけどさ、気分になんてゲームするだけで上手くいったよ。こんな簡単ならもっと早く始めればよかった」

苦心して再生を伸ばそうとしている実況者が聞いたら涙するか殴りかかりそんなことを平気で言ってるのけ、そのけろりとした顔には悪意など微塵も見られなかった。

（昔からそう言う奴だったよな。こいつは）

それが良いのだ、などと本人を前にしては口が避けても言えないのだが。

「何さ。人の顔じつと見て」

立ち上がり、レビンの不思議そうにレビンの顔を見返しておもむろにその頬をつねる。

「やめいっ！何すんだいきなり！」

「おお、敏感肌……」

訳の分からないことを言う。と、気が付く。

「それで、今日は何だ？また飯でも無くなったか」

「ううん」

首を振って、はにかんだ様に笑ってから、パソコンを指している。

「今日はね、それを見せに来たんだけど、もう見つかったやつたね」

何だか恥ずかしいよ、と楽しそうに付け加える。

ようやく再生が終わり、ポケモン金の実況第一回目が終了する。

コメントは好意的にその実況を湛え、早くも次のアップを心待ちにしていた。

「どう、かな」

ぼつりと。すぎるにしては本当に小さな声で、呟く。

「え？」

思わず聞き返すが、すぎるはレビンの方を向いていなかった。ちらちらとこちらの表情を伺いつつも、そっぽを向いている。

「だから、これ、この実況。初めてにしては、上出来かな、とか思

ったんだけど」

頬がやや染まっているのは気のせいかな。

そういったことには気が付いていないような口ぶりを意識しつつ、レ빈は答えた。

「どうって……まあ、いいんじゃないか？」

自分で考えてみてもひどい曖昧さだったが、それでもすぎるは背けていた顔を輝かせてこちらに首を振る。

「変にオドオドしてないし、雰囲気も良い。視聴者の反応だって上々だ。この実況動画の多い時に、上手く埋没しないような色が出るし、実際これが始めてつてのは大したもんだろうよ」

それは本心だった。一年前ならともかく、今は群雄割拠、実況戦国乱世である。再生数が千以下の動画が数え切れないほどに並び、その多くが日の目を見ずに潰える。そんな中、初実況で一つ目の動画から当たるのは並大抵ではない。

ルーツのような非凡な才覚を満載した非常識な人間に出会ったこともあって感覚が幾分鈍くなっていたが、改めて考えてみればすぎるだって十分に資質ある実況者である。

そんなことをつらつらと思いつつと顔を上げると、すぎるは顔を赤くして、日に透かしたガラス球みたいな目を大きく開いて固まっていた。

（何で照れる）

反射的に疑問に思う。実況動画を褒められることはそんなに恥ずかしいことだろうか。

「あ……」

あんぐりあけたすぎるの口から、ようやく声が出たのはきっかり三秒後だ。

「あ、あはは、えへへ……。そう、これ、良かった？面白かったんだ……」

なにやら足をもぞもぞさせながら噛み締めるように笑い声を上げている。しばらくその様子を見てからレ빈はそろそろ正気に戻そう

と肩に手を書ける。

「おい。戻って来い。今夜は中華だぞ」

いつもは飯の話ですぎるに關しては全てが収まるのだ。今回も一応すぎるは奇妙な笑いを止めたが、それでも顔の赤みは若干残ったままだった。

「風でも引いたか？」

そう言つてすぎるの額に手を当てて熱を測ろうとする。が、すぎるはそれを振り払つて憤慨した。

「ちがうよ！失礼だなあ…」

「じゃあ一体何なんだ」

「もういいよ。全く……」

何なんだろう。嬉しがったり照れたり怒ったり忙しい奴だ。

「それで、今後もやってくるの？」

「とーぜん！」

びしっとブイサインを決めて、そう答えてくる。ブイサインの意味は良く分からないが、多分すぎる本人も分かつてはいないだろう。

奇妙な話だった。立て続けに二人も、身の回りの知り合いが実況を始めている。しかもその二例とも大成功を収めていた。実況業界という物があるならば、それは狭くは無いもののそれほど広いわけでもない。そんな中で言えば、稀有な出来事だといつても良いだろう。

「ばりばりやってくよ。れびんなんてすぐ追い抜いて、そのうち羅刹ラジオにだって出てやるから」

勢いづいてか、自信の籠った声で言ってくる。いつもところと良く表情が変わるすぎるだが、今日は特にそれが顕著である。

「お前そんな実況好きだったっけ」

素朴な疑問だった。ついこないだまではレビンが実況していることを知っており、それには目を通していたらしい物の、他の実況動画にはそれほど関心が無かったはずである。いきなりといえはいきなりの今回のアップは、青天の霹靂だ。

「だから、さっきも言ったじゃん。置いて行かれないの。それに」

音も無くそこですぎるは一度細く息を吐いた。

「負けたく、ないから」

「負けたく……？誰に」

「れびんにだよ。ルーツさんには負けたくないけど、レビンにはもつと負けたくない」

「なんで」

「だって……」

そこまでのようだった。何かを言いかけたすぎるは、一度しっかりと口を噤んでから頬を膨らまして不満を顕わにした。

「いいや。言わない。何だかずるいよ、私ばかりさ。れびんはちつとも気がつかない上に私にさらけ出したことなんて無いのに」

一方的にそんな言葉を残して、とてとてと歩いていつもレビンが食卓兼雑事に使っている、布団を取り外されたコタツ机の前にぺたりと座る。

「で、中華って何作るの？わたしエビチリが良いな。かんしゃおしやーれん！」

結局食ってくのか。

分からない事だらけだと溜息をつきつつも、少しは止めの夕餉の支度にレビンは取り掛かった。

＊

安らかな、やや安らかすぎる寝息を聞き流しつつ、すっかり暗くなった窓の外を見つめる。満腹になるとすぐ眠りこける癖のあるすぎるはコタツの横に座布団を四つ縦に敷いて牛になりつつある。これでちつとも太らないのが不思議でならねえ——毎度の事ながらそう思いつつ、冷えてしまわないよう今は使っていない夏用掛け布団を肩にかけてやる。

パソコンは低い唸りを上げつつ五本目のエンコード中だった。

（そしたらまずラジオをしよう、か……）

ルーツの言葉が海馬辺りから自動再生される。

他の実況者との共同企画は今までもあった。勿論ラジオも何度か出演した。しかし、ルーツとのラジオを想像すると、それは他のラジオとは違った感覚を想起させる。

ルーツの声、口調、話題、それらを想像しつつ、楽しみにまでしている自らに気が付き、レ빈は驚いた。

自分は実況がしたいのか。

（俺は多分、彼女との実況がしたいんだ……）

曖昧な思いだった。その曖昧さをそのままにすることがどれだけひどいことかは、後々分かったことだったが、勿論それは言っても詮無いことなのである。

月日つてのは、思うに後ろから前へ、または前から後ろに流れていくような物じゃないんじゃないかと思うことがある。そもそも歴史の全てと未来の全ては今この現在に全て詰まっていて、人々はそのある地点を知覚し続ける——といったような。

ルーツとは、あれ以来会っていなかった。時たまメールのやり取りをするものの、それは実況に関する事務的なものばかりだ。以前食堂で交わしたような心地よい会話などはしていない。多忙な人だから、と心中で勝手に納得しつつも、レ빈は一人で例の図書館屋上に登ってみたりもしていた。

しかしそこで待ち構えるのはカウンター越しに見るバーバ・ヤガーのやや鋭すぎる眼光と吊り上った眉、無人の屋上にかさかさと転がる落ち葉だけだった。

馬鹿馬鹿しいことにそんなことを三度は繰り返した。ただ単純に会いたいと連絡をとればよかった気もするが、互いに実況者としてラジオを早く実現させたいという共通感がある。少なくともレ빈はそう信じて、実況を続けた。

兎に角も、気が付けば待ち望んでいた時期が既に訪れていた、というのは人生で珍しくもなんとも無い光景だ。

レ빈はPCを前に固まっていた。

ほんの数日前にレ빈はFF3のパート30辺りをアップし、同時に卒論の仕上げに追われていた。実況のできは上々で、予想外の反響を呼んだ前作学怖シリーズに肉迫する物になっていた。

一方ルーツの動画は著しい伸びを見せ、パート一にいたっては再生数が十万単位だ。化物め、と驚嘆しつつも、どこかでこうなることは分かっていた。

それぞれが動画においてまずまずの功績を挙げ、機は熟したといつて過言ではない。レ빈自身、この辺りがベストだと感じていた。だから、久々のルーツからのメールにラジオの放送予定日時が書かれていても、さして驚かなかった。

ただ、予期していなかったことが二つ。

一つはすぎるがゲストに来るらしいこと。ここ最近すぎるの動画は大当たり状態で、途中データが消える憂目に会いつつも、まるでそんなこと無かったみたいにぐんぐんと伸びている。今じゃ例のポケモン赤実況動画に匹敵しつつある。レ빈に対して宣言した羅刹ラジオへの参加もそう遠くないんじゃないだろうかと思えるほどにそれは著しい伸びだった。

二つ目は、ラジオのタイトルが既に決定している（ルーツの中で）事だった。

“レ빈、ちなみにこの記念すべき私と君のラジオのタイトルは、『密談』にしようと思う。なんともそそられるだろう”

何にどうそそられればいいのか若干理解しかねたレ빈だったが、じっくりとその五感に感じ入ると、どうしようもなくそそられている自分に気が付き、苦笑した。何でもお見通しなのだろうか。

結局、一も二も無く快諾した。細かい予定などを詰めようと、メールに返信するためボタンに指をかけた辺りで、『グッド・ロッキン・トゥナイト』がスピーカーから流れ出す。手の中の携帯が着信

していた。

驚いて画面を見やると、知らない番号だった。レ빈はしばし迷ってから、ちょっとした予感と共に応答する。

「……はい」

「わっち。久しぶりだねレ빈」

スピーカー越しの荒い音声でも一発で分かる。清涼感と共に耳をさりと撫でる美声は、勿論ルーツの物だった。

「やっぱり」

「おや、あまり驚いてないようだね？」

「何だかそんな予感がしてたから。……それで、何で俺の番号を？」

「ふふ……実はすぎるに教えてもらったんだよ」
(すぎる……?)

唐突な話である。ルーツとすぎるが知り合いなんて事は聞いたことが無かった。

「大分前に大学内で彼女に捕まってね。実況のことをあれこれきかれたよ。その時に教えてもらった」

「あいつが？何でまた」

「その辺りは本人から聞きだすことだね。ああそれで今回ゲストに呼ぶことになった理由もそこにあるんだ。彼女にはラジオのこともというっかり話してしまっただけど、彼女は私が君と二人きりでラジオをやるといったらえらく狼狽してね。その後である賭けをしたんだよ」

「賭け？」

何だかさっきから質問してばかりだった。

「そう。最初は彼女に取り合うつもりは無かったんだけど、どうやらある衝動に突き動かされての物みたいだったから、つい折れてしまっただけ」

言っている意味は良く分からなかった。すぎるがルーツに実況関連で関わりを持とうとした理由も良く分からない。

「それで一つ提案した。本来は君と私の二人でやる予定のラジオだけど、そこに条件付ですぎるを呼ぶとね。私は彼女の動画が万単位の再生を叩き出したら出演させるといったんだよ」

「ええと、それはいつ頃？」

「私がクロノを上げる前」

つまり自らも実況では牧村以外で全く無名の状態でそんな条件を出したということになる。あきれるくらいの自信だった。

「それで結局、すぎるは勝った、と」

「そう。私としては面白い実況者が増えてくれて嬉しいけれど、君との密談に分け入られることを思うと少し複雑な気分だね」

確かに第三者に割り込まれるのは不本意だが、それでもすぎるは気の知れた奴なんだしいんじゃないだろうか別に。

そんな独り言を聞き取られたのか、ルーツは少々抑え気味のトーンで後を続けた。

「……レビン、君ももう少し人の心の機微に関心を持つといいよ」

「え？」

「まあそれもいいところ、か。それじゃあ本題に入ろう」と、一つ一つレビンの記憶の中で何かが繋がっていく。

急に実況を始めた過ぎる、若干不思議なほどに動画の人気を獲得しようと思気込んで痛すぎる。

（このため、だったのか……？）

ぐるぐると思い出しては考えつつ、レビンはルーツとの打ち合わせに入った。

翌日。

レビンはほのかな確信と共に鉄扉を開いた。今日はバーバも幾分穏やかな顔をしていた。きっと予感当たる。

今回は、歌は聞こえなかった。

代わりに、見たことの無い優しい微笑がレビンを屋上へと迎え入れた。

「やあ。きつと来ると思ってた。運命的だね」

「いや、実はたびたび来てたんですけどね」

「知ってるよ」

どれ位ぶりに見るだろうか、足を組んで転落防止のフェンスに軽く寄りかかったルーツは、記憶の中よりも三割り増しで鮮烈な輝きを放っている。後は、多少髪が伸びたかもしれない。

「まさかこんなに事が上手く推移するとは思っていなかった。私がい況で成功することもだけれど、君のい況も予想以上にいい出来だった」

照れることを堂々という。ルーツ以外の人が言っても何の真実味も感じられないだろうな、とレ빈は苦笑した。

「俺も驚いたよ」

「へえ？」

片目をつぶって小首を傾げる彼女に、ここ最近ずっと言えなかった賛辞を送る。

「今頃になって、ルーツみたいな実況者が出てくるとは思わなかった。視聴側として熱狂できる動画なんて久しぶりすぎてどんな風に反応していいか分からなかった」

冷たい風に溶け込むみたいにしてルーツが笑う。背筋がこそばゆくなるような視線をレ빈に向かって真っ直ぐ向けたまま、近づいてくる。

「簡単だよ」

目の前まで来て、ルーツは片手で薄い紙束を差し出して、もう一方の手で、レ빈の手を取り、それを握らせた。

レ빈が目を通してみると、それはルーツ、レ빈、すぎるのスカイプの情報や進行プログラムなどが書かれた、『密談』のための書類だった。

これは、と問うよりも先に、ルーツは答えてきた。

「身体に熱が籠ったなら、脳髓に言葉が溜まったなら、私たちにはそれを吐き出す場があるんだ。私と君、そしてすぎるの視聴者たち

が支えてくれる、これ以上ないステージが、ね」

「……………」

「ん？どうしたんだい？」

何だか言葉が出なかった。ほんの少し前までは、単なる暇つぶしか、そうでなければ片手間に行う気紛れでしかなかったのだ。

それが、たった数週間で、三人合わせてどれだけ視聴者の数を増やしただろう。限界だと思えるような地点は、いつどのくらいのときに通り過ぎたのだろうか。

いつからこんなに楽しくなったのか。レビンの身体に長らく染み付いていた倦怠感は、綺麗に消えていた。

「いや、何だかひどく変な気分で」

「変な？」

「その、ルーツとのラジオが、楽しみは楽しみんだけど、それとは別に緊張というか：これまでに無い、いい意味での予覚がある気がするんだ」

胸のうちにある感覚を言葉にするのは難しかった。

「縁って言うのかな。ルーツとは、どうあってもこうなっていた気がする」

しかし、苦し紛れにそう言ってからルーツを見ると、そこには非常に珍しい物があつた。

普段は余裕と勝気に満ちた鋭い笑みの浮かんでいるはずの顔が、ぽかんとした、どこか呆気にとられたような物になっている。いつもは切れ長で猛禽みたいに見えていた両目も、以外に丸くむしろ幼さすら漂わせるような愛らしい物であることが見て取れる。

レビンのそんな反応を見て取ったのか、ルーツはやや恥ずかしそうにレビンから視線をずらし、少々の間言葉を選んで、やがてにっこりと微笑む。

「……嬉しいよ。こんなに早く伝わるとは思ってたなかった。私はあの意味君の心臓に言葉を届けるために実況をやったのだけど、こんな早くにそんな風に思ってくれたのは本当に、嬉しい。うん、嬉

しいな」

ルーツが何を言っているのか、レ빈は半端ではあるものの分かるような気がして、同時にほっとしてもいた。自分の感覚がけて間違っているのではない。その事実だけで満足がいくものだった。

「レ빈、最高のラジオにしよう。私と君の、新しい実況への第一歩だ。前線深くを掘り進む非常識な塹壕みたいなラジオに」

「ああ」

軽く握り拳を作って、前に振る。

そこにルーツも拳を出して、軽くぶつける。

実況が、単純な言葉を幾つ重ねたって語れない思いをたった二三十分で伝えてしまうように、軽く触れ合った指先同士が、様々な感覚を共有する。

不思議な感覚に二人が浸っていると、横合いから不意打ちみたいにもう一つ腕が伸びて、やや強めに二つの拳にぶつかる。

驚いてそちらを見ると、見慣れた栗毛とやや不満そうな瞳があった。

「やる気になるのはいいけどさ、大事なゲストほっというて打ち合わせはどうかと思うよ二人とも」

すぎるだった。

いきなりの登場にレ빈が驚いていると、ルーツはまるで予期していたように流れるようにそちらを向いて反応した。

「ああすまない。でもすぎる、打ち合わせはこれからだから心配しなくてもいい。ゆっくり三人で愛でも語り合おうか」

自然な手つきですぎるを撫でつつ、ルーツが言う。されるがままになっっている野良猫みたいに頭を撫でられて、すぎるは言い返した。

「もう、ぜんぜん冗談になってないよ」

「私はいつでも本気だよ。冗談で生きたことなんてない」

「だからだよ」

「いや、冗談だ」

なにしてんだあんたら。

その日は、馬鹿みたいに寒い屋上で三人打ち合わせとも雑談ともつかない協議に熱中していた。夕方になってバーバが額を青筋で埋め尽くして屋上に上がってくるまでそれは続いていた。

すぎるは準備をするといつて一人で意気込みながら帰路に着き、やがてルートとレビンも帰ることになった。

そこで始めて分かったことだが、ルートの自宅はレビンの家から徒歩で十分もかからない、同じ住宅街の中にあるらしかった。二人でそんなことを笑いつつ、最寄の駅で地下鉄を下車して、すっかり暗くなった外へと出る。

並んで歩きながら、大通りから住宅街への細い道へと入る。

やがて、駅に近いレビンのマンションの前まで辿り着く。

「じゃあ、今日は楽しかったよ。久々に心の底から楽しんで話をしたような気がする」

満足そうに、ルートは笑った。いつもの笑顔だ。

「ああ。俺もだよ」

そう答えてから、少し付け加える。

「ああ、その、何ていうのかな。ルート」

「なんだい？」

こんなとき、地球の裏側まで透き通って続いてるんじゃないかと思えるようなルートの目に覗き込まれると、何だかどぎまぎして言葉を続け辛かった。

「ええと、今回のこと、誘ってくれて有難う。感謝してる。もしかしたら俺は、あのまま実況なんて止めてたのかもしれない。何がしたくて何をやっているのか、考えもせずに徐々にどこか平坦なところに戻ってたかもしれない」

そこで一息入れて、もう一言付け加える。

「会えてよかった。本当に」

やや早口にそう言って、じゃあ、と別れようとして気が付いた。

ルートは昼と同じように、またもいきなり抱きつかれでもしたか

のように素の表情に戻っていた。心なしか頬が赤い。

「……君はたまに、何も考えずに人を引き込むようなことをするね」
そう言って、そっとレビンの手を握る。

唐突なことにレビンが照れつつもルーツを見ると、ルーツは目を閉じて力の抜けた笑顔で続けた。

「レビンは落ち着くね。しっかり気を張っていても、こうして一緒に居るとすぐに無防備な状態に戻ってしまう」

「それは」

俺も同じだ。

言おうとしたそれを、ルーツはレビンの口元に人差し指を当てて遮る。

「ラジオ、視聴者を存分に驚かしてやろうと思うんだ。私とレビンならそんなの簡単だからね。それで最後に視聴者皆に言わしてやろう」

どこかで鳥の鳴き声があった。きっとそれは歌だった。

「こいつはすげえや、ってね」

＊

放送当日。朝早くから意味もなくレビンの部屋を訪れたすぎると意味もなくテンション高めの会話をして、意味もなく気合の入った料理を二人で食べて、意味もなく走ってすぎるは帰宅した。

お前何のために来たんだよ、とは言わなかった。なんとなく落ち着いていられないのはレビンも一緒だったからだ。

放送開始は七時だった。テスト放送は既に済んでおり、そのときはレビンとすぎるはほとんど参加せずに音声のみのチェックで済ました。

放送はネット上の掲示板とも連動しており、リアルタイムで書き込みが成されるようになっていいる。尚裏方としてルーツの知り合いたちがバックアップしてくれているらしい。

デスクトップの右下、時計の表示は放送開始一分前を示している。はやる気持ちを抑えてレ빈は依然渡された紙束にもう一度目を通した。

タイムスケジュールのページ、ラジオ開始から数分間はルーツがソロでつかみを担当と書いてある。具体的なことはどこを見ても明記されておらず、ルーツその人に聞いても結局教えてくれはしなかった。

『聞こえるかい？』

ルーツだった。パソコンを通した声だけで、その胸中の興奮まで感じられたように思えて、レ빈は意気込んで答えた。

「ばっちりだ」

時計表示が一瞬の瞬きを残して、変化した。

『それじゃあ行くよ』

ラジオがオンエア状態に入る。視聴者数を見たらあらゆる意味で気が萎えそうに思えて、レ빈は目を閉じた。生でオンエアする緊迫感からか、瞼で作られた真っ黒な視界一杯に見たことの無い大勢の他人の顔が勝手に浮かぶ。その全員が平坦な、人形めいた無表情を浮かべているのを見てしまい、心臓を絞られるような緊張が走る。

自信がないなんて事はない。ルーツもすぎるも、そしてレ빈自身実況者としては十分知名度の高い部類に入る。

それでもこうして始まってしまうと、手掛かりのない大海原に一人放り出されたみたいで、心のどこかに不安が湧き出してくる。

そんな足音無く這い寄る影みたいな不安感を粉々に砕いて吹き飛ばしたのは、歌声だった。

君に全ての羽を届けよう

このおかしな一日を送ろう

だけど 雷が遠くに落ちるってことはつまり

僕たちが一緒にいるって事だ

氷で削りだした凶器みたいな声だけが先ず最初に響き、その直後雪崩のようにメロディが流れ出す。あふれ出した声と音はそのまま勢いを増して、ネットを通じて日本中、或いは世界中に散らばっていく。

バックの音声と生の歌声が鏝迫り合いをするかのごとく牽制し合い、切り結び、かと思えばいつの間にか調和して、聴く者を絡めとる。

圧巻だった。

感じたことの無い物を感じ、聴いたことの無い物を聴き、レビンは自分が息をするのも忘れていることにしばらく気が付かなかった。数多くの人々が電話線越しに息を呑む様が見て取れる。

それはきつと、たまらなくおかしい光景だ。

視神経の奥に光の爆発を残して、歌が終わる。一瞬だけ宇宙が終わってしまったかのような静寂が耳に突き刺さり、すぐにルーツが話し始めた。

『さて、季節の変わり目に贈るラジオ、密談。第一回は私とレビン、そしてあるゲストと共に進行していこうと思う』

後はもう、勢いに任せてのフリートークだった。過去、食堂で交わしたような雑談から始まり、テンポ良く実況について語る。書き込みを上手く拾いそこから様々な話題へと飛び火させ、機を見計らってすぎるを呼ぶ。

三人のファンが大きくなうねりを見せ、放送後半にかけて続々とリスナーも増加する。カウンターは信じられない数字が占有し、レビンはにわかに信じられないそれを見つつも上がりきったテンションを脳内麻薬で維持し最高潮を保つ。

まるで洗練された殴り合いだ。

大声で笑い出したい気分だった。ただ、それをするのはラジオが終わってからにしなければならぬ。

絵に描いたような大成功だった。

＊

PCの電源を落として、一息つく。

ラジオが終了しからもう三十分ほど立つというのに、レビンの鼓動は未だに放送中の興奮をたっぷりと残していた。続いていた緊張と放送中の高揚感が一気にはじけ飛んで、頭がくらくらする。

想像したことさえ、無かったのだ。

実況者同士のラジオが、こんなとてつもない物になる所なんてものは。

体中が熱っぽい。きつとルーツもすぎるも、今はそれぞれの家で感じてる。それが分かる。

一生続けばいい。

冗談交じりに、そう考える。止めたくても止められない感覚。取り憑かれるってのは、多分こういうことだ。

ルーツの言葉がよみがえる。

『これで終わりじゃない。もっともっと、とんでもない動画にして行こう』

次の密談。

それを心待ちにしつつ、レビンは体に残る興奮を無理矢理冷ますように、床に就いた。

3・何のぬくもりも無いただの抜け殻

夜明けの薄明かりが無生物的な色彩を町のコンクリートの群れにそつとぶちまける。

昨夜の興奮を冷ますように、白い息を吐きながらルーツは住宅街を散歩していた。肩からかけた黒いストールが微かになびく。

レ빈は大当たりだった。人材としてだけでなく、一個人としても気に入ることの出来る、いい実況者だった。そんな彼を自分の身勝手な目的のために使ってしまった気がして多少気が晴れない。

（実際、そのつもりで近づいて、思い通りに誘導してしまっただけだ）

それを言ったら、彼はどんな顔をするだろうか。

今時のやや豪胆な若者を気取ってはいるが、恐らく内面はひどく繊細な少年に過ぎない。また実況を休止してしまうだろうか。

胸や腹に、悪寒が走る。大気の冷たさのせいだけではない。

自らの馬鹿げた行いに、レ빈を巻き込んでしまっただけだ。どうするのだ……。

（いや）

それでも、と思い直す。

（これは、彼のためにもなる。彼がああ可愛らしいすぎると共に今後にも変わりなく安寧を享受する為の、必要なこと、だった）

そう一人で呟いて、やがて空しさに嘆息する。十分に冷えた吐息は、今度は白く濁らずに空気に溶け込んだ。

そもそも何故こんなことになってしまったのか。自分が独りになったのはいつからなのか。

いつもの空虚な冷たい感覚が体の内側にひっそりと広がる。いつもはそれが通り過ぎるのを身を縮こまらせて耐えるしかない。

しかし、その冷たさは一瞬で掻き消えた。

脳裏に浮かんだのは、二人で夜、並んで歩いたときの、レビンだった。

（駄目……）

頼ってはいけない。彼は、あくまでも自分が実況者として目立つための道具に過ぎない。守るべき他人でしかない。

（私はいつから思い違いをしてる……？）

レビンに言うことに嘘は含まないようにしていた。だが、思うべきでないことを思い、伝えるべきでないことを伝えたかもしれない。

もっと淡泊に事を進めればよかった。

（でもそれでは昨日のラジオの成功は無かった）

当初の思いとはちぐはぐな現状が恨めしい。どうしてこうも上手くは行かないのか。

「マザー2……」

かつて自らの傍らにいた者。最愛といっても言いその名を虚空に流す。

「懐かしい名前だね」

どこか甘ったるいその声が耳に入ると同時に、ルーツは眦を吊り上げて振り向いた。

「貴様！」

「久しぶりだね。まだこんなところに居たのかい？」

言葉を見殺してルーツは懐に手を入れ、取り出したコインを裂帛の気合と共にそいつに投げつけた。

物理法則を半ば無視して一直線に飛翔したコインはしかし、いとも簡単にそいつの手で弾かれる。

「君たちはいつだって原始的だ。僕等の科学水準の足元にも及ばな

い……今時アナクロな肉体改造なんて未開惑星でしか流行らないよ」
面白そうにそう言って、そいつ、風間望はスラックスのポケットから小さな黒い板を取り出した。

「こいつのおかげで僕の体は構造を無視して物理強化されてる。無駄なことは止めるべきだね」

「あああああ！」

へらへらと笑うその顔に拳を叩きつける。引きつるような痛みが走るが無視して振りぬくと、風間は逆らわずに吹き飛ぶ。道路沿いのガードレールにぶつかり、ゆっくりと地に落ちる。ひしゃげたガードレールがその威力を物語っていた。

「……………」

荒い息を殺して、ルーツは相手の挙動に集中した。

やがて、ゆらりと風間の体が動き出し、何事も無かったかのように立ち上がる。

「駄目だね。こんな物じゃいくらやったって無駄だ。君もいい加減分かりたまえよ」

にい、っと。顎を上げて、口の端を邪悪に歪め、満足そうに笑う。

頭に血が上る。この風間の表情は、あらゆる意味で許せない。

視界が真っ赤に染まる中再度風間に近づこうとして、ルーツは驚愕する。相手の姿が一瞬で掻き消えている。

「がっ」

わけが分からないまま、眼前の風景が高速で流れる。少し遅れて、ルーツは自分が高速で動いたのだと気が付いた。背中が熱い。

風間に蹴り転がされて道路の上を跳ねたルーツは、全身の痛みに思わず肺の奥から息をこぼす。

「はははははははははは！何て無様だ！まるで地球人だ！」
哄笑が聞こえる。ノイズのかかった耳でそれを捕らえるが、どうしようもない。

痛みで体が言うことを聞かない。脱力した四肢は気の遠くなるような速度でしか反応しない。

「君、僕に会いに来たんだろう」

こちらの顔に合わせて風間が身をかめ、言ってくる。それは正解だった。

「こんな焦らなくとも、すぐにいい機会が来るさ。僕はそこで待ってるし、君だってそのために色々動き回ってきたんだろう？こんなところで殴りかからなかったっていいじゃないか」

ルーツはただ射殺するような眼光で答えた。

ふっとあきれたように風間は笑い、立ち上がる。

「心配しなくても君の目論見は上手くいってるんだよ。僕のお仲間結構前から君に目をつけていたし、僕だって君を推薦しておいた。ま、岩下さんはどういうか知らないけれど、大体皆君で決定することに賛成だと思うよ」

力を込める。ぎりぎりの自制心で痛みを無視して何とかルーツは立ち上がった。だが、一歩も動けそうに無い。

「それなのに君ときたら僕が姿を見せただけでこれだ。まあ早めに終わらせてしまいたいのは分かるけど、いささか早計だね。こんなところで本気でやりあったらこの町一つで済むか分からないよ。ああそれとも――」

くると、何かの舞踏のようにその場でターンする。しかしそれは決して踊りの類ではない。彼らは躍ることが出来ない。

「あの少年を巻き込みたくは無かったのかな。ここで僕をどうこうできれば君はこれ以上彼を使って自らを宣伝しなくて済む」

レビンのことを言っているのだと、すぐに気が付く。本当に、この風間を含めた『彼ら』は自分のことを観察していたのだ。

「それでももう意味は無いよ。君は十分自分を売り込んだし、『僕ら』も君に決定しようとしている。実際大したものだよ？ちよっと前まではあの少年でほとんど決まりだったのに、いきなり出てきた君はそれ以上の逸材だった」

逃げるべきか一撃を与えるために近寄るべきなのか。どちらにしろ身体はその両方に不足する性能しか発揮できそうに無い。ルーツは

歯噛みした。

しかしそんなことを他所に、風間はこちらに背を向けたまま歩き始める。待て、と声を上げたものの、ルーツの口からはただ白い擦れた息が漏れて消えただけだった。

「もうすぐ僕らは次の聞き手として君を迎える。そのときこそ君は僕に正当な復習をする機会を手に入れることになる」

独り言のように、わけも無く楽しげな声をあたりに散らしつつ、風間の姿が住宅の間にかかった薄い霧の中に消えていく。

視界からその背中が消える直前、風間は付け足した。

「待ってるよ。殺人クラブで、ね」

そうだ、おとなしく待ってればいい。

そのときこそ、悲願の成就の、唯一のタイミングなのだから。

いつの間にか濃くなってきた朝もやの中、力の抜けた身体を路上に横たえて、ルーツはそう恨めしそうに呟いた。

息が白い。

*

夢だ。

夢を見ながらそれが夢だと分かるのは珍しいことではない。レビンは度々夢の中で目が覚めることがあった。

それまで奇妙な臨場感の合った周りの景色や香り、様々な感触が急に現実味を失って萎れる。あたかも一人称視点のゲームでもしているようなありふれた、面白みに欠ける映像へと夢が変化する。

たいていレビンは自分が夢を見ているのだと意識した場合、すぐに目を覚まそうと心がける。夢だと分かってしまった夢にはそれこそ夢が無い。高い場所から飛び降りたり道路に飛び出したりして、意識を現実に戻そうとするのだ。そうして一旦目を覚ましてからもう一度、今度は夢だと分からない夢を見る。

しかし今回は何故だかそんな気も起きなかった。

目の前に映っているのは見慣れた自宅のパソコンの画面、その中で再生されている動画だった。

学校であつた怖い話に屈さない

何度も見たことのある、自分の代表作。

画面は奇妙な緑色の生物を映し出し、動画内のレ빈は笑いながらそれに反応している。

（ああ、これは）

それを見ただけで、その動画がどの辺りの物か分かる。

（確かこれは、隠しシナリオで……あのふざけた風間の、宇宙人の話だ）

印象の強いエピソードだった。悪い意味で、だが。

自己の正体がスンバラリア星人であると告げた風間望が、主人公鬼塚をも同属だと勘違いして、鬼塚はその状況から必死で逃げ出そうとする。滑稽と評して余りある、珍妙な話だった。

『いや、こいつはデベロンダッタ星人ではない。ニヤリン星人だ』
風間は新聞部部室に侵入してきたスンバラリア星人の長官が、実は異なる異性人であつたことを知って驚愕している。その傍らで、やけを起こしてはったりをかまし、その上それが当たってしまった鬼塚が風間以上に驚愕していた。床に倒れ伏した異星人、ニヤリン星人は、鬼塚が無理に掴みかかったことによってあっさりと息を引き取っていた。無論、ニヤリン星人に呼吸器系があればの話ではあるのだが。

結局ニヤリン星人を撃退した功績によって鬼塚は次のスンバラリア長官に仕立て上げられ、そして……

『そして全てが終わった……』

画面からはレ빈の突っ込みと罵倒が笑い混じりに流れ続けている。

それを夢の中でレ빈は静かに見つめていた。不思議と、夢から

覚めようという気にはならない。何かそうしてはならないという予感めいた物がレビンの夢の中で行動を著しく阻害する。

やがて動画の再生が止まる。

いつの間にか、レビンの視点は一人称としての自瓶の視点ではなく、パソコンの前に座った自分を斜め後ろから見下ろす物になっていた。

音のしなくなったパソコンを前に、レビンの身体はピクリとも動かない。

耳が痛いほどの静寂に、レビンの意識は苦痛を覚えて、体がそこに無いにもかかわらず身じろぎをした。

突然、重たい音がして、パソコンデスク備え付けの椅子から、レビンの体がずり落ちる。驚いてみると、その体がゆらりと立ち上がり、一瞬その輪郭線がぶれる。ピントの合わない写真のような残像を残して元に戻ったレビンの身体は、しかしどこかおかしかった。

そいつが振り向く。

険の鋭い顔立ち。しっかりとしまった、鍛えられた肉体。

断じてそいつはレビンなどではなかった。

「よう、レビン」

聞いたことも無いのに、それが誰の声か、レビンの意識には分かってしまう。

白い歯を見せて笑うそいつの手には、てかてかと光る赤いボクシンググローブが握られていた。

「お前、は好きか？」

止めろ！

反射的に叫ぼうとする。しかし夢の空間にレビンの身体はもう無い。そいつに乗っ取られ、今は逃げることも声を上げることができない。

「そうか。はいいぞ」

そう言って、そいつは赤い、血染めのグローブを手にはめて、振り

上げた。

これは夢だ。はっきりと分かっている。
これは、夢だ。

「スポーツはいいぞ！」

「てーれってれーえええええ！」

わけの分からない叫び声で、目が覚める。それはまごう事なき自分の叫び声だった。

そろそろ退去処分とかならないだろうか。

そう心配しつつ、手の甲で額の汗をぬぐう。肌に馴染んでいるはずの布団が何故だか今朝はよそよそしい。夢見の悪さのせいか、ひどく体がだるかった。

時計を見る。まだ早朝だった。

「夢でよかった……」

心底安堵して、溜息をつく。冒険野郎はゲームの中か夢の中で十分だ。

荒い息を落ち着け、冷蔵庫から水を取り出して口に含む。心地よい清涼感が口腔に満ち、悪夢の余韻が綺麗に取り払われていく。

晴れやかな気分に戻れば、後に残るのは昨日の興奮と喜びに満ちた時間の記憶だけだ。あのラジオは味わい深い記憶になる。

着替えと洗面を済まし、キッチンに立つ。機嫌が良かったので、いつも食べている菓子パンの類は止めて、食パンに冷蔵庫のあまり物とチーズを乗せて即席のピザトーストもどきを作る。しばらくオーブンで焼き、皿に取り出して食卓へ。

インスタントコーヒーを入れつつ、パソコンでニコニコへアクセスし、マイリストに入れてあるルーツの動画一覧へ。

「更新は来てない、か」

昨日の今日なのだから、当たり前だった。

それでもクロノの新パートは待ちきれない。既にそれを視聴する

のが習慣化していた。

昨夜のラジオもルーツは録音しているらしいから、程なくアップされる。生で賛美されたあの放送は、ニコニコではどのような評価を受けることになるのか。

（楽しみだな）

なんと充溢した朝か。日差しも肌寒さも、今日は輝かしい。

鼻歌など歌いながらトーストに口をつける。

「美味い」

上出来だった。

続けて自分の動画のほうもチェックする。おおむね好評だが、次からはもう少しマップで迷わないよう何か工夫をする必要があるかもしれない。

次の動画のためのことを無意識で考えている自分に気がついて、レ빈は苦笑した。

現金なものだと思ったからだ。ついこの間の自分が見たらなんと言うだろう。案外、素直に羨ましいと言うのではないだろうか。今日はこのまま学校も何も無い一日だ。何本か動画を撮る良い機会だと思い、レ빈がヘッドセットをUSBオーディオデバイスのジャックにつないだところで携帯のスピーカーが『バーバ・ヤガー』を室内に響かせる。野生的でテンポの良いその曲はメール着信のものではない。

手にとって開くと、すぎるからの音声着信だった。

しばし迷ってから、応答ボタンを押す。こんな早朝に一体なんだろうか。

「……おはよう。なんかあったか？」

「おおあり！兎に角すぐ来て！」

「来て、ってどこにだよ」

「私ん家だよ決まってるでしょ」

決まってるのかよ。

もう少し詳しいことを聞こうかとも思ったが、電話越しのすぎる

は相当に焦っているようで、切迫した感じがダイレクトに伝わってくるその声と話しぶりに、レ빈は追求することを諦めた。

「分かった。すぐいくから待ってろ」
切る。

今日も慌しい一日になりそうだった。

＊

レ빈の家とすぎるの家は近いといえるほどは近くない。地下鉄で三駅分、という通そうではあるが、実際は自転車で急げば十分とかからない。

見通しの良い片側四車線の大通りのこれまた広い歩道を、固着した冬の寒さを切り碎くようにして進むこと約十五分、レ빈はすぎるが暮らすマンションに到着する。

白塗りの綺麗な建物で、周りも高級受託が立ち並ぶ場所。レ빈が暮らす場所と比べれば、同じ間取りでも何千円違うか分かったものではない。

これまでも何度かは訪ねたことのある、見慣れた場所だった。迷い無くすぎるの部屋の玄関のドアへと向かう。綺麗に清掃されたマンション内の通路は、レ빈のところよりも矢張り高級感が見える。

白塗りのドアに手をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0827g/>

実況小説 居酒屋であった Lovin ' Forever! に屈しない

2010年10月10日06時07分発行